

お話をよく聞く子どもを育てる

「お勤め・ご法話」が
お話をよく聞く子どもを育てる

法話を聞いて、想像力を養い、豊かな感性を育む。

日々の「お勤め・ご法話」がお話をよく聞く子どもを育てます。

子どもたちが仏さまの前で元気に朝のお勤めをしています。

浄土真宗のお寺では仏さまをご讃嘆する「お勤め・ご法話」が決まった様式として行われてきます。ある先生は「お勤めをし、ご讃嘆を聞くことが浄土真宗の門徒の最も大切なつとめです」とよく言われていました。子どもたちも慈悲のまなざしの仏さまのことを思いながら「お勤め」をして、「ご法話」を聞いています。お母さんお父さんのような仏さまのお話を安心して聞くことでしょうか。

ここは、お母さんお父さんのような仏さま、つまりナモアミダブツの満ち満ちている世界なのです。幼い子どもたちがお話をよく聞くのは、話をしている人を「信頼」している（＝信じている）からです。自分のことを大切にしてくれて、失敗しても責めることなく温かく心配してくれる先生だからこそ、子どもたちは「信頼」し、先生の紙芝居や読み聞かせの時間を楽しく、うれしい気持ちで過ごし、熱心に目を輝かせてお話を聞くのです。

「まことの保育」で大切にしている「聞く」ということを、浄土真宗では「他力の聞」と言います。「他力」とは、仏さまが誓われた「全員をお救いします」というナモアミダブツのお名号が「いま」「ここ」で私に満ちてお救いくださっているということであり、その救いの内にいるから、私たちは仏さまのお話を安心して（＝信じて）聞くことができます。

「信じる」とは「相手の言うことをそのまま受け入れて聞く」ということです。言い換えれば「相手の言う通りになっている」状態のことであるので、「信じる」とは、私が聞いて「間違いない」と思い込むことはありません。

たとえば、親と子どものやりとりの中で、「遊んでばかりいないで勉強しなさい！」と親から言われて、言われた通りに勉強する子どもが「親の言うことを聞いて勉強している」と思っているうちは、確かに親の言うことを「聞いて」はいますが、「信じる」という意味の「聞く」ではありません。この場面においては、「親の言うことを聞いて勉強している」ということを忘れて、ただ無心に勉強しているというような状態が「信じる」という意味の「聞く」ということになるのでしょうか。

親心が満ちて、親の願いを考へるようになること、お話をよく聞く子どもになります。

あるお母さんのお話です。ある日のこと、身体が気だるく熱があるようなので早めに帰宅して布団に寝ていると、丁度、太郎君が帰ってきました。寝ているお母さんを見て「お母さん、どうしたの？」とビックリして近寄ってきました。「お母さん、ちょっと頭が痛い。だからお小遣いを机の上に用意しているから、遊びに行っておいで」と言うと、太郎君はすぐに家を出ていきました。しばらくして太郎君が帰ってきました。すると「お母さん、これ食べてよくなってね」と飴玉を出してお母さんに食べさせてくれようとしたそうです。いつもはお母さんが太郎君のことを心配してお世話をしているのに、今日は子ども太郎君の方から「よくなって」と心配されているのだと分かると、お母さんは思わず涙があふれてきて泣いてしまったそうです。泣いていると飴玉を食べられないので、太郎君が「お母さん、食べて元気出して」と繰り返し返すその言葉に、また涙が止まりませんでした。という心温まるエピソードです。

日常生活のナモアミダブツの仏さまの「お勤め・ご法話」が、お話をよく聞く子どもを育てます。太郎君は、お母さんの気分が悪くて臥せている様子をよく見てよく聞いたから、太郎君の、お母さんへの飴玉を食べてもらって元気になってほしいという行動につながったのでしょう。太郎君とお母さんは共に生きて生かされていること（共生）に出会えました。お母さんの太郎君への思いだけではなくて、太郎君がお母さんのことを心配しているという思いをお母さんは知ることができました。

大いなる智慧と慈悲に満ち満ちたナモアミダブツの仏さまの救いのおはたらきに包まれて、子どももお母さんも、お父さんも、そして先生も「共に生きて生かされている」人生を元気に精進いたしましょう。

教育原理委員会 水上覚也

まことの保育の願い